

山間過疎地域で暮らす独居・夫婦世帯高齢者の支援に関する研究 — 後期高齢者の“安心感のある暮らし”に焦点をあてて —

山間過疎地域で暮らす独居・夫婦世帯高齢者の支援に 関する研究

—後期高齢者の“安心感のある暮らし”に焦点をあてて—

平成 25 年度 山梨県立大学地域研究交流センター地域研究事業助成報告書

平成 26 年 3 月

研究代表者：森田 祐代（山梨県立大学看護学部 老年看護学）
研究分担者：流石ゆり子（山梨県立大学看護学部 老年看護学）
渡邊 裕子（山梨県立大学看護学部 老年看護学）
萩原理恵子（山梨県立大学看護学部 老年看護学）
小山 尚美（山梨県立大学看護学部 老年看護学）
今橋 美穂（山梨県甲州市役所 地域包括支援センター 保健師）
雨宮 ゆみ（山梨県甲州市役所 地域包括支援センター 保健師）
研究協力者：手塚 義一（山梨県甲州市大和町 水野田地区長・自主防災会長）
古田 京子（山梨県甲州市大和町 水野田地区担当 民生委員）

目 次

I	諸言	1
II	研究目的	3
III	用語の操作的定義	3
IV	研究方法	4
	1. 研究参加者	
	2. データ収集方法	
	3. 分析方法	
	4. 実施場所及び実施期間	
	5. 倫理的配慮	
V	研究の地域貢献との関連性	7
VI	他学部及び学外の研究者・協力者等への波及効果	8
VII	結果	9
	1. 研究参加者の基本属性	
	2. 山間過疎地域で暮らす独居・夫婦世帯高齢者のソーシャル・サポート授受の実態及び“安心感のある暮らし”	
	1) 独居高齢者のソーシャル・サポート授受の実態	
	2) 独居高齢者の“安心感のある暮らし”	
	3) 夫婦世帯高齢者のソーシャル・サポート授受の実態	
	4) 夫婦世帯高齢者の“安心感のある暮らし”	
VIII	まとめ	25
	謝辞	26
	文献	26
	資料	31
	1. 研究協力依頼文(保健師用・自治会区長用・民生委員用)	
	2. 研究協力承諾書	
	3. 研究参加者への依頼文	
	4. 同意書(本人用・保管用)	
	5. インタビューガイド	
	6. 老研式活動能力指標	

I. 諸言

わが国の総人口は、今後、長期の人口減少過程に入り、平成 38（2026）年に人口 1 億 2,000 万人を下回った後も減少を続け、平成 60（2048）年には 1 億人を割りさらに減少し続けることが推計されている¹⁾。一方、総人口が減少するなかで少子高齢化の進行により、わが国の高齢化率は上昇を続け、平成 25（2013）年には高齢化率が 25.4% で 4 人に 1 人となり、その後もさらに上昇し続け、平成 72（2060）年には 39.9% に達して国民の約 2.5 人に 1 人が 65 歳以上の高齢者となる社会が到来すると推計されている¹⁾。また、これらの影響を受け、中山間農業地域においては著しい高齢化に直面し過疎化が進行しており、総務省では「過疎地域自立促進特別措置法」（平成 12 年）に基づき、地域の自立的発展・活性化の促進を目指し各県で取り組みが強化されている。しかし、農林水産業や建設業などの基幹産業不振、雇用の場の不足、医師不足、生活交通の不足などの多くの課題を抱え、特に地理的・地形的条件の厳しい地域においては、集落機能の維持が困難な集落が発生し、生活扶助機能の低下や耕作放棄地の増加といった住民生活の安全・安心に関わる問題をもたらすなど、深刻な状況が発生している²⁾³⁾⁴⁾。このような中、坂道の多い地形や近隣との距離などの条件から、山間過疎地域で生活する高齢者は人との交流が持ちにくい可能性も考えられる⁵⁾。一方、高齢者は不安や不便を感じながらも今の生活を楽しみながら、住み慣れた地域で最期まで生活することを望んでいる³⁾⁴⁾⁶⁾。

高齢者が住み慣れた地域で生活続けることは、わが国における介護保険制度の基本方針とされている。住み慣れた地域において、尊厳を保ちながら生活することは高齢者の生活の質に大きな意味をもつ。しかし、加齢に伴う心身機能の変化から生活範囲が縮小しやすく、特に後期高齢者では些細な出来事がきっかけで健康が脅かされ、要介護状態に陥る可能性が高いと言える。また、高齢期の社会関係は、心身機能の低下や社会的役割からの離脱によって縮小しやすいことから、長年培ってきた伝統的なコミュニティの変化は高齢者の健康や生活に深刻な影響を及ぼすことが懸念される。これらのことから、高齢者の生活を支えるにはその地域の特性や当事者の意思を踏まえたソーシャル・サポートが必要と考えられる。

ソーシャル・サポートの重要性は、1960 年代から指摘されてきたが、ソーシャル・サポートという用語が登場したのは 1970 年代であり、その定義は様々である。Norbeck, J. S. は、①人と人との相互作用及び関係、②課題や問題に対する感情面あるいは実際的な助力の提供、③ネットワークのメンバー、④相互的または同等に与え与えられる関係、という 4 つの共通する特徴で説いている。ソーシャル・サポートは機能面からみて、愛情や思いやりを内容とする「情緒的サポート」と、介護などの労働や物的な支援の授受を伴う「手段的サポート」に大別される。また、ソーシャル・サ

ポートには授受の双方向があり、他者から受ける「受領サポート」と他者に向けられる「提供サポート」があると言われている。高齢者は加齢に伴いソーシャル・サポートの受領が増加に転じることもあるが、ソーシャル・サポートは授受のバランスを保つことが重要で、一方的にサポートを受けることは受け手に罪悪感や依存心を増幅させるおそれのあることが示唆されている⁷⁾。

高齢者をめぐるソーシャル・サポートの研究は数多く報告されており^{7)~11)}、それらの結果は年齢、性別、配偶者の有無、居住形態、居住地域などの属性によってサポートの授受の内容は異なることや、必ずしも一様ではないが、近隣との関係の重要性について明らかにされつつある^{12)~18)}。また、ソーシャル・サポートは孤独感を低減させ、その結果QOLを高めることも報告されている¹⁹⁾。特に一人暮らしの高齢者にとっては情緒的サポートの「生活で何らかの不自由があっても、心配事や悩みを聞いてくれる人がいる」ことによって主観的幸福感が高まることが示唆されている²⁰⁾。さらに、後期高齢者では体調の変化などの異変を見過ごしてしまう危険性も高いことから、安心して生活を継続するためには、日頃から声の掛け合いができるソーシャル・サポートが重要であると言える。

先行研究においては、高齢者が家族の中で何らかの役割を見つけ、誇りを持ち続けることや仲間との結びつきがあることで健康である自分を確認でき、住み慣れた地域で暮らし続けられることが明らかにされている³⁾⁴⁾⁵⁾¹²⁾²¹⁾²²⁾。また、健康の維持増進や介護予防、高齢者の生活を支えるフォーマル・インフォーマル・サポートに関する研究は数多く見られるが、高齢者が考える“安心感のある暮らし”に焦点を当てた研究は少なく、その具体的な内容は十分明らかにされていない。

以上のことから、高齢化率の高い山間過疎地域で生活する後期高齢者が最期まで安心して住み慣れた地域で生活し続けるためには、地域の見守りや共助を含めた継続的なソーシャル・サポートの授受とそのネットワーク化が重要であると考えられる。そのため、高齢者が居住する地域特有の課題と合わせそこで暮らす高齢者の“安心感のある暮らし”に焦点をあて、高齢者が考える“安心感”を探りながら高齢者保健福祉活動における支援を考えていく必要がある。

Ⅱ．研究目的

1. 山間過疎地域で暮らす独居・夫婦世帯高齢者のソーシャル・サポート授受の実態及び高齢者が考える日々の生活における安心感を明らかにする。

2. 1 を踏まえ、高齢者が住み慣れた地域で最期まで暮らし続けるために必要な支援及びそのネットワークのあり方について明らかにする。

Ⅲ．用語の操作的定義

本研究では、「山間過疎地域」「独居・夫婦世帯高齢者」「ソーシャル・サポート」「安心感のある暮らし」を以下の定義で用いる。

1. 山間過疎地域

「山間地域」とは農林水産省においては、農林統計に用いる農業地域類型の基準指標では林野率が 80%以上、耕地率が 10%未満の地域であるとしている。本研究においてもこれに基づき同様に定義する。「過疎地域」とは、人口が長期にわたり減少した地域を指し、総務省の過疎地域自立促進特別措置法により指定された地域である。

2. 独居・夫婦世帯高齢者

独居世帯高齢者とは、近くに親族（子ども等）がいない一人暮らしであり、独立した生計を営んでいる者を指す。また、夫婦世帯高齢者とは、65 歳以上の夫婦のみで生活し、2 世帯住宅は含めない。

3. ソーシャル・サポート

ソーシャル・サポート研究の第一人者である Antonucci は、「援助、感情、肯定を主要な要素として含む対人関係」と定義し、対人関係から生起する機能的側面としてとらえようとした²³⁾。本研究では Antonucci の定義を参考に、高齢者が地域で生活する中で授受する情緒的および物的手段による対人関係上の支援全般を指す。

4. 安心感のある暮らし

住み慣れた地域で、現在および今後の生活も含め心配や不安がなく、自分らしく生活できる（する）こと。

IV. 研究方法

1. 研究参加者

A 県の過疎地域自立促進方針の地域に指定されている B 町。B 町は 9 つの地区からなり、その中で最も高齢化率が高い D 地区で生活する 75 歳以上の後期高齢者のうち、独居および夫婦（夫婦のいずれかが 75 歳以上）のみで生活する 16 名を対象とした。なお、研究参加者は日常会話が可能な者とした。

【地域の概要】

A 県の指定過疎地域 B 町は標高 500m 以上、林野率 96.6%の地域であり、総面積は、A 県の総面積 4,465 km²の 0.97%にあたる 34.31 km²である。山間部で水田は少ないため、生業は僅かな畑作のほか養蚕や煙草などの商品作物の栽培、林業や製炭などの山稼ぎ、宿場での駄賃稼ぎが行われていた。しかし、これらは戦後に衰退しはじめて若者は働く場所を求めて移住し人口減少、少子高齢化が伸展していった。

B 町の人口は、平成 25(2013)年 4 月現在 1,309 人で、高齢化率は 35.2%、後期高齢者率は 20.6%である。人口は戦後より経年的に減少し続けると共に、年齢別の人口では高齢者人口の占める割合が急速に増加し、一方、年少人口数が減少していることが特徴である。D 地区の人口は 124 人で、高齢化率は 51.6%、後期高齢者率は 33.1%である。D 地区は 56 世帯からなり、単独世帯が 10 世帯、65 歳以上の高齢夫婦世帯が 17 世帯である。

2. データ収集方法

データ収集はインタビューガイドを用いた半構成的インタビューを実施した。インタビューは研究参加者の希望する日程と場所を指定してもらい、研究参加者のプライバシーを保護するとともに、研究参加者が語りやすい環境をつくるように配慮した。

研究参加者からは、①基本属性（年齢、性別、居住年数、健康状態、活動能力〔老研式活動能力指標²⁴⁾〕、②生活の様子については、1 日の生活の流れ、日常の中で近所づきあい・人づき合い、地域行事への参加、買い物等について聴取した。その中で「不安に思っていること」、「この地域で最期まで暮らし続けるために必要なこと（条件）」、高齢者が考える“安心感のある暮らし”について自由に語ってもらった。③ソーシャル・サポートの授受については、困った時の相談相手、困った時

実際に支援をしてくれる人、使う社会資源、また、自分が他者にどのような支援を行っているのかなどについて自由に語ってもらった。

インタビューの回数は1回とし、インタビュー時間はひとり40～60分程度とした。インタビューの内容は、研究参加者に承諾を得てメモによる記録とテープに録音し、逐語化したものをデータとした。

3. 分析方法

- 1) 基本属性については記述統計量を算出した。
- 2) 質的帰納的な分析方法を用いて分析した。作成した逐語録を繰り返し読み、ソーシャル・サポートに関連する内容ならびに、高齢者が考える日々の暮らしにおける安心感について語られている部分を中心に抽出し、一文一義になるように文章を区切り、文脈が損なわれない表現になるようコード化した。コードを相違点や共通点について比較することで分類し、類似したものをまとめて、その内容を適切に表現するサブカテゴリを抽出した。そして、サブカテゴリの類似性と相違性に留意しながら分類しカテゴリ化し抽象度を高めた。

データ分析の過程では、質的研究の経験をもつ研究者のスーパーバイズを受けた。なお、分析結果の信頼性・妥当性を高めるため、コード化、カテゴリ化までのプロセスは、共同研究者間で意見が一致するまでディスカッションを繰り返し分析を行った。

4. 実施場所及び実施期間

場所：以下の2つのうち、研究対象者の希望する場所とした。

- ・研究参加者の自宅
- ・研究参加者が生活する地区の集会場

期間：2013年7月～9月

5. 倫理的配慮

1) 対象となる人への人権の擁護

「ヘルシンキ宣言」及び「看護師の倫理規定（日本看護協会）」等に従って、以下の点を遵守した。

- ・人々の知る権利及び自己決定の権利を尊重し、その権利を擁護する。
- ・守秘義務を遵守し、個人情報の保護に努めるとともに、これを他者と共有する場合は適切な判断のもとに行った。
- ・山梨県立大学看護学部及び看護学研究科の研究倫理審査委員会の承認を得た後実施した。

- (1) 地区担当保健師・自治会区長・民生委員に研究の目的、方法、内容について依頼文書（資料 1-①②③）を用いて口頭で十分に説明するとともに、研究への協力は自由意思に基づくこと、所属の組織からの強制力を受けることはないこと、匿名性を保持すること等を併せ説明した。
- (2) 基本属性や逐語録は個人が特定されないよう番号表記とし、データ類は戸棚に施錠して保管し、匿名性を保持した。
- (3) 分析終了後は、シュレッダーにて裁断破棄すること、録音した音声は確実に消去し、データの入った電子媒体はデータ消去ソフトを用いて復元不可能にするとともに初期化し破棄することを説明した。
- (4) 研究ならびに調査に関する質問や心配等について、いつでも問い合わせができるように研究協力に関する依頼文書（資料 1-①②③）に問い合わせ先を明記した。
- (5) 論文作成時には、個人や地域が特定されうると判断した事柄については削除あるいは変更して記載した。
- (6) 研究結果は、今後の地域支援等の参考資料にしてもらうため、地区担当保健師を経由し、自治会区長ならびに民生委員に文書にて報告する。また、研究結果を学会等で発表すること、その際には匿名性を保持することを依頼文書に明記した。

2) 対象となる人の理解を求め、同意を得る方法

- (1) 対象となる地区の担当保健師ならびに自治会区長および民生委員に研究の概要について記載した文書（資料 1-①②③）を用いて説明を行い研究の承諾（資料 3）を得た。
- (2) 研究参加者については自治会長または民生委員に候補者の選定を依頼した。

- (3) 研究参加者に対して、本研究の目的および調査内容と調査方法について記載した文書（資料 3）を用いて口頭で十分な説明を行うと共に、研究協力は研究参加者の自由意思を尊重すること、研究への参加は強制ではないこと、研究への協力を拒否しても不利益は一切生じないこと、研究の途中であっても同意を撤回できること、得られたデータは研究の目的のみに使用し、研究終了後は確実に破棄すること、匿名性の保持と公表等について十分に伝えた。
- (4) 研究の趣旨を理解して研究協力へ同意をする場合は同意書（資料 4-①②）へ署名をしてもらった。
- (5) インタビューの場所は研究参加者の希望を聞きながら自宅または地域の集会場を選定し、研究参加者の都合の良い日程および時間帯に行った。
- (6) インタビューは研究参加者が疲労しないよう 40～60 分程度とし、疲労の程度を確認しながら適宜休憩をとり、研究参加者のプライバシーを保護するとともに、語りやすい環境をつくるように配慮した。

V. 研究の地域貢献との関連性

本研究での対象は、山間過疎地域で暮らす独居・夫婦世帯の後期高齢者である。山間過疎地域は今後ますます高齢化が進むことが懸念され、過疎地域の活性化と併せて高齢者が自立した生活が送れることが重要と考えられる。しかし、後期高齢者の健康特性から些細なことがきっかけで日常生活が一変し、寝たきりなどになり得る危険性が高い。そのため、高齢化率の高い山間過疎地域で生活する後期高齢者が今後も安心して住み慣れた地域で生活し続けるためには、地域の見守りや共助を含めたソーシャル・サポートの授受の機能が重要であると考ええる。しかし、高齢者本人が考える安心感について、生活上の安心感を明らかにした研究は少ない。そこで本研究では、当事者である高齢者にソーシャル・サポート授受に関することや生活の様子について生の声を聴くことにより、高齢者が生活する地域のソーシャル・サポートの実態と課題が明らかになり、高齢者が安心した生活を送るために必要な支援のあり方について示唆を得ることができる。ひいては高齢者がその人らしい生活を実現し、QOL を高めることにも寄与することが期待できる。

VI. 他学部及び学外の研究者・協力者等への波及効果

近年、人口の急激な高齢化により高齢者人口の割合は年々増加している。いわゆる“団塊の世代”が75歳以上となる2025年へ向けて、高齢者が尊厳を保ちながら、住み慣れた地域で自立した生活をおくることができるよう、国は、医療、介護、予防、住まいおよび生活支援サービスが、日常の場で切れ目なく提供できる地域での体制づくりを推進している。そのためには、高齢者の生活実態を明らかにし、当事者の声を聴くことにより高齢者の生活を支えるフォーマル・インフォーマルなどの様々なサポートの仕組みを構築するための貴重な資料を得ることができる。さらに、高齢者のQOLを高め、高齢者が望む生活を実現するために必要な地域支援ネットワーク作りに寄与することができる。

VII. 結果

1. 研究参加者の基本属性

研究参加者は女性 9 名 (56.3%)、男性 7 名 (43.7%) で、平均年齢 82.4 ± 4.7 歳 (75～91 歳)、居住年数の平均は 63.0 ± 16.2 年 (22～83 年) であった。研究参加者のうち独居が 6 名 (37.5%)、夫婦世帯が 10 名 (62.5%) であった。研究参加者の日常生活における活動能力を測定する老研式活動能力指標 (13 点満点) の平均は 8.2 ± 3.2 点 (0～11 点)、手段的 ADL (5 点満点) の平均は 3.7 ± 1.7 点 (0～5 点)、知的 ADL (4 点満点) の平均は 3.2 ± 1.4 (0～4 点)、社会的 ADL (4 点満点) の平均は 2.8 ± 1.4 点 (0～4 点) であった。(表 1)

表1 研究参加者の基本属性

参加者	年齢	性別	世帯構成	居住年数	健康状態	老研式活動能力指標			
						手段的ADL	知的ADL	社会的ADL	合計点
A	87	女性	独居	61	良好	4	4	3	10
B	88	女性	独居	68	治療中	3	3	3	8
C	82	女性	独居	58	良好	4	4	3	10
D	87	女性	独居	60	治療中	0	0	2	2
E	91	男性	独居	22	良好	4	4	1	8
F	83	男性	夫婦	83	良好	5	4	2	9
G	85	女性	夫婦	55	良好	0	0	0	0
H	91	男性	夫婦	81	良好	5	3	3	9
I	80	女性	夫婦	55	治療中	4	3	4	10
J	80	女性	独居	66	治療中	3	2	3	6
K	83	男性	夫婦	83	治療中	5	4	4	11
L	85	女性	夫婦	50	治療中	5	4	0	7
M	75	男性	夫婦	75	治療中	5	4	4	11
N	76	男性	夫婦	66	治療中	5	4	4	11
O	80	男性	夫婦	80	良好	2	4	4	8
P	75	女性	夫婦	45	治療中	5	4	4	11

世帯構成別にみると、独居高齢者では女性 5 名（83.3%）、男性 1 名（16.7%）で、平均年齢は 85.8 ± 4.1 歳（50～91 歳）、居住年数は 55.8 ± 17.0 年（22～68 年）であった。老研式活動能力指標の合計（13 点満点）は 7.3 ± 3.0 点（2～10 点）、手段的 ADL（5 点満点）は 3.0 ± 1.5 点（0～4 点）、知的 ADL（4 点満点）は 2.8 ± 1.6 （0～4 点）、社会的 ADL（4 点満点）は 2.5 ± 0.8 点（1～3 点）であった。（表 2）

表2 独居高齢者の基本属性

参加者	年齢	性別	世帯構成	居住年数	健康状態	老研式活動能力指標			
						手段的ADL	知的ADL	社会的ADL	合計点
A	87	女性	独居	61	良好	4	4	3	10
B	88	女性	独居	68	治療中	3	3	3	8
C	82	女性	独居	58	良好	4	4	3	10
D	87	女性	独居	60	治療中	0	0	2	2
E	91	男性	独居	22	良好	4	4	1	8
J	80	女性	独居	66	治療中	3	2	3	6

夫婦世帯高齢者では女性 4 名（40.0%）、男性 6 名（60.0%）で、平均年齢は 80.4 ± 3.9 歳（75～85 歳）、居住年数は 67.3 ± 14.9 年（45～83 年）であった、老研式活動能力指標の合計（13 点満点）は 8.7 ± 3.4 点（0～11 点）、手段的 ADL（5 点満点）は 4.1 ± 1.7 点（0～5 点）、知的 ADL（4 点満点）、社会的 ADL（4 点満点）は 2.9 ± 1.7 点（0～4 点）であった。（表 3）

表3 夫婦世帯高齢者の基本属性

参加者	年齢	性別	世帯構成	居住年数	健康状態	老研式活動能力指標			
						手段的ADL	知的ADL	社会的ADL	合計点
F	83	男性	夫婦	83	良好	5	4	2	9
G	85	女性	夫婦	55	良好	0	0	0	0
H	91	男性	夫婦	81	良好	5	3	3	9
I	80	女性	夫婦	55	治療中	4	3	4	10
K	83	男性	夫婦	83	治療中	5	4	4	11
L	85	女性	夫婦	50	治療中	5	4	0	7
M	75	男性	夫婦	75	治療中	5	4	4	11
N	76	男性	夫婦	66	治療中	5	4	4	11
O	80	男性	夫婦	80	良好	2	4	4	8
P	75	女性	夫婦	45	治療中	5	4	4	11

2. 山間過疎地域で暮らす独居・夫婦世帯高齢者のソーシャル・サポート授受の実態及び“安心感のある暮らし”

1) 独居高齢者のソーシャル・サポート授受の実態

研究参加者 6 名の逐語録より、ソーシャルサポート授受に関連する内容が表現されている部分を抽出した結果、111 のコードが作成された。この 111 のコードについて類似性と相違点に留意しながら分析した結果、43 のサブカテゴリが抽出され、最終的に抽象度を高めた【近隣とは昔から物をあげたりもらったりしながら行き来しお互いに気に掛けあって生活をしている】【別居の子ども達がいいつも気にかけて見守ってくれる】【皆年を取ってしまい足が悪く近所を行き来してお付き合いすることが困難になった】【近隣の人はすぐに駆けつけてくれて一番頼りになる】【子どもが一番頼りになる】【介護保険サービスの人が親切に生活を支援してくれる】【近所とうまく付き合っていくにはほどほどの関係がいい】【近所の人もお互いに年を取っているので特別な相談をすることはない】【子どもや近隣以外に定期的に訪問してくれる人がある】【介護保険サービスは使っていないが行事には参加している】の 10 カテゴリが抽出された。各カテゴリ名とコード数を表 4 に示す。

表 4 独居高齢者ソーシャル・サポート授受のカテゴリ

カテゴリ	サブカテゴリ	コード数
近隣とは昔から物をあげたり、もらったりしながら行き来し、お互いに気に掛け合っ て生活をしている	近所の人が誰かどう野菜や煮物などを持っ て来てくれる	8
	隣近所とはお互いに挨拶をしたり行き来して 相互に気に掛け合っている	6
	近所の人は色々なことを気にかけてくて当 たり前のように生活を助けてくれる	4
	昔から近所付き合いはいい方だ	4
	留守になるときは近所に声をかけて出かける	1
	長い間一緒に暮らしているので、特別なお付 き合いではなく今まで通りの付き合いをして いる	1
別居の子ども達がいいつも気にか け見守ってくれる	別居の息子や娘は心配していいつも電話をかけ てきてくれる	5
	別居の息子や娘が病院に連れていってくる	4

	何か用があって電話をすれば別居の息子が来てくれる	3
	何かあれば別居の息子に相談する	2
	別居の息子や娘はうんと頼りになる	2
	別居の息子や娘はちょいちょい来て家の中のことをしてくれる	2
	別居の息子や娘が買い物に連れて行ってくれる	2
	お金の管理は娘に託している	2
	通院の時の送り迎えなど別居の嫁さんがほとんどやってくれる	2
皆年を取ってしまい足が悪く、近所を行き来してお付き合いすることが困難になった	近所の家を訪ねたりお付き合いをすることはほとんどない	4
	近所の人とお付き合いをしたいがお互いに遠慮してしまい付き合いがない	4
	足が悪く交通手段がないので出かけられない	3
	年を取ってしまい部落の人や外部の人との付き合いができなくなった	2
	地域の年 1 回の道路清掃も具合が悪くなって皆に迷惑をかけるといけないので組長にお願いし去年から休ませてもらっている	1
近隣の人はずぐに駆けつけてくれて一番頼りになる	隣の人を一番頼りにしている	6
	何かあった時に近所にはずぐに駆けつけてくれる人がいる	4
	急に具合が悪くなったときは隣のおじさんに助けてもらう	3
子供が一番頼りになる	息子や娘は心配していつも電話をかけてきてくれる	5
	何か用があって電話をすれば息子が来てくれる	3
	何かあれば息子に相談する	2
	息子や娘はうんと頼りになる	2
	息子や娘はちょいちょい来て家の中のことをしてくれる	2

	息子や娘が買い物に連れて行ってくれる	2
	お金の管理は娘にお願いしている	2
	息子や娘が病院に連れていてくれる	4
	通院の時の送り迎えなど嫁さんがほとんどやってくれる	2
介護保険サービスの人が親切に生活を支援してくれる	デイサービスの人やヘルパーさんが至れり尽くせり生活を支援してくれる	9
近所の人とうまく付き合っていくにはほどほどの関係がいい	野菜などやたら持って来ても一人暮らしだからほどほどでいい	2
	近所の人や知り合いに自分がしてあげていることがある	4
	近所の人とうまく付き合っていくには、ちっとおかしいなと思うことでも言わないこと（嫌われるようなことは言わない）	1
近所の人もお互いに年を取っているので特別な相談をすることはない	もうこの年だから近所の人困り事で相談に乗ることはない	3
	近所の人や友だちと会話をすることがある	2
	お互いに年をとっているから、そうそう特別なお願いはできない	1
子供や隣近所以外に定期的に訪問してくれる人がある	民生委員が定期的に回ってきてくれて相談に乗ってくれることがうんと嬉しい	7
	商店の人が配達時に気にかけてくれたり生活を支援してくれている	2
介護保険サービスは使っていないが行事には参加している	介護保険などのサービスは使っていない	3
	公民館でやっている健康教室に参加している	2

2) 独居高齢者の“安心感のある暮らし”

研究参加者6名の逐語録より、“安心感のある暮らし”に関連する内容が表現されている部分を抽出した結果、169のコードが作成された。この169のコードについて類似性と相違点に留意しながら分析した結果、43のサブカテゴリが抽出され、最終的に抽象度を高めた【別居の子どもたちがいつも気にかけて生活を支援してくれるので安心だ】【近隣はいつも気にかけてさりげなく生活を助けてくれるのでありがたい】【皆年を取ってしまい地域で人と会うことが少なくなりさみしい】【病気などの健康のこと

が不安になる】【年を取ったが健康で好きなことをして住み慣れた地域で暮らし続けられることが安心だ】【介護保険サービス事業所の人が親切に生活を支援してくれるので安心だ】【段々年を取り足腰が悪くなり転ぶことが心配で外出する機会がないことがさみしい】【民生委員や近隣の人と話をすると安心する】【色々考えてもなるようにしかならないので、生活の中での不安はない】【山間部なので自然災害が一番怖く不安だ】【災害はいつ起こるか分からずなるようにしかならないので特別な準備はしていない】【災害時は一時避難所まで逃げるのがやっとで他には何も考えられない】【部落外に出かける時はバスを利用しているが、バス停も遠く本数も少ないので不便だ】の13カテゴリが抽出された。

各カテゴリ名とコード数を表5に示す。

表5 独居高齢者“安心感のある暮らし”のカテゴリ

カテゴリ	サブカテゴリ	コード数
別居の子どもたちがいつも気にかけて生活を支援してくれるので安心だ	子どもと頻回に電話をしているので安心だ	5
	別居の子どもが定期的に来てくれるので安心だ	4
	別居の子どもや嫁がうんと頼りになり安心だ	4
	皆親を心配してくれて安心だ	4
	子どもがお金の管理をしてくれているので安心だ	3
	別居の子どもが定期受診や買い物の際は連れていってくれるので安心だ	3
	何か困ったことがあればすぐに息子が来てくれるので安心だ	2
近隣はいつも気にかけてさりげなく生活を助けてくれるのでありがたい	近隣の人は皆親切で色々と気にかけてくれるので安心だ	6
	急病の時は近隣や友人が助けてくれるので安心だ	4
	近隣の人がさりげなく生活の手助けをしてくれることが嬉しい	4
	近隣の人が野菜や煮物などを持って来て気にかけてくれることがありがたい	4
	隣の人が一番頼りになる	3

	困った時にすぐに駆けつけてくれる近隣の人 がいることが安心だ	3
皆年を取ってしまい地域で人 と会うことが少なくなりさみ しい	子どもの数や人口が減ってしまい昔から続い ている行事が廃止になってしまうことがさみ しい	11
	皆年を取ってしまい外出することもなく人に 会うことも少なくなってしまうさみしい	8
病気などの健康のことが不安 になる	病気の具合が悪くなることや健康のことが心 配だ	7
	ひとり暮らしで年を取っているので孤独死す ることが一番不安になる	4
	ひとり暮らしで一日中誰とも喋らないことが 多く思うように言葉が出てこないことが不安 だ	3
年を取ったが健康で好きなこ とをして住み慣れた地域で暮 らし続けられることが安心だ	健康でいられるように自分のことは自分でで きるように頑張っている	6
	命があって好きなことをして生活できること が安心だ	3
	家族に色々心配をかけるがやっぱりこの家が いい	3
	介護保険などのサービスを使わないで生活で きていることが安心だ	2
介護保険サービス事業所の人 が親切に生活を支援してくれ ているので安心だ	デイサービスでは自分のことをよく分かった 上で色々してくれるので安心だ	4
	デイサービスでは自分を気づかってくれるの でうれしい	3
	ヘルパーさんが1日2回来てくれて家事をし てくれるので安心だ	3
	デイサービスに行くことが一番楽しい	2
	デイサービスに行く際に職員が戸締り等安全 を確認してくれるので安心だ	2
段々年を取り足腰が悪くなり 転ぶことが心配で外出する機 会がないことがさみしい	段々年を取って足腰が悪くなり転んだり歩け なくなってしまうことが心配だ	7
	転ぶことが心配で外出することが億劫だ	3

	外に出かけたいが足も悪く一緒に行く人もいないのでさみしい	3
民生委員や近隣の人と話をすると安心する	民生委員さんがよく回って来てくれて色々と相談にのってくれるから安心だ	5
	あまり人に会えないから、たまに誰かと話をすると楽しい	5
色々考えても、なるようにしかないので、生活の中の不安はない	なるようにしかないので、生活の中で不安なことはない	8
	明日死ぬのもしょうがないし、あまり長く病まないで逝けるといい	3
山間部なので自然災害が一番怖く、不安だ	災害に備えての準備をしてあるので安心だ	4
	山間部なので自然災害が一番怖い	3
	子供がいつも気にかけてくれるが、災害時は連絡も来たりすることもできないと思うので不安だ	2
災害はいつ起こるか分からず、なるようにしかないので特別な準備はしていない	災害が起きてもなりようにしかないのでなりゆきに任せる（心配してもしょうがない）	3
	災害に備えての準備はしていない（非常食の備蓄、近隣の人との協力）	3
災害時は一時避難所まで逃げるのがやっとで他には何も考えられない	災害が起きても自分が避難するのが精一杯で他のことは考えられない	3
	災害時、一時避難場所へは様子をみながら行くつもりでいる	2
部落外に出かける時はバスを利用しているが、バス停も遠く、本数も少ないので不便だ	移動にバスを利用しているが、本数やバス停までの距離があり大変だ	3
	用事がある時、移動にはバスを利用している	2

3) 夫婦世帯高齢者のソーシャル・サポート授受の実態

研究参加者 10 名の逐語録より、ソーシャル・サポート授受に関連する内容が表現されている部分を抽出した結果、282 のコードが作成された。この 282 のコードについて類似性と相違点に留意しながら分析した結果、64 のサブカテゴリが抽出され、最終的に抽象度を高めた【夫婦でお互いの健康を気遣いながら生活している】【子どもや孫がいつも気にかけてくれて生活を支援してくれる】【地域に若者が少なくなり昔からの

行事も廃止になり色々なことに参加しなくなった】【近所との付き合いはほとんどない】
 【近隣の人は悪口を言うのでほどほどの付き合いがいい】【近隣とは物をあげたりもらったりしながら行き来してお互いを気にかけて生活をしている】【困り事などを近隣や友人と相談し合っている】【皆年を取ってしまい互いに行き来したり集まる機会がなくなった】【困り事や今後の生活などは一人で考えず家族に相談している】【災害時には家族や近隣など誰かしらの援助が必要だ】【人と会って話すことを楽しんでいる】
 【坂道が多く交通手段が限られているので出かけるのに不便だ】【介護保険サービスは利用していないが時々民生委員が訪ねてきてくれる】【医療・介護のサービスを利用しながら生活している】【地域の人たちと協力し合っている】【子どもや孫に会いたい気持ちもあるがあまり頼りきらないようにしている】【自分のできることは自分の役割だと思い協力している】【災害時のいざという時の対応が曖昧だ】【地区に週 1 回来る移動販売車を頼りに買い物をしている】【子どもなど家族から相談されることはない】【市町村合併し昔に比べて保健師との関わりも少なくなった】【体調がいつ悪くなるか分からないので主治医に相談しながら一人で入院の準備をしている】【年金収入では生活が厳しく介護保険サービスは利用できない】の 23 カテゴリーが抽出された。

各カテゴリ名とコード数を表 6 に示す。

表 6 夫婦世帯高齢者ソーシャル・サポート授受のカテゴリ

カテゴリ	サブカテゴリ	コード数
夫婦でお互いの健康を気遣いながら生活している	夫婦互いに思いやり感謝しつつ生活している	8
	夫婦で協力し合いながら家事をしている	5
	身体の不自由があるためご飯の支度は夫がしてくれる	5
	夫婦で協力して畑仕事を頑張っている	4
	移動が必要な買い物は夫婦二人で行っている	3
	徒歩も車の運転も難しいので何か用事があるときは夫に送迎してもらう	3
	一番頼りになるのは奥さんだ	1
	夫が干す場所近くまで洗濯物を持っていくってくれる	1
子どもや孫がいつも気にかけてくれて生活を支援してくれる	子どもや孫がいつも気にかけて連絡をくれる	6
	別居の子どもや孫がよく来てくれる	5

	別居の子どもがいつも気にかけてすぐに駆けつけて面倒を見てくれる	4
	別居の娘が定期的に来て家事を手伝ってくれる	4
	別居の子どもや孫が自分たちの話をよく聞いてくれる	3
	何かと頼りになるのは子どもだ	3
地域に若者が少なくなり昔からの行事も廃止になり色々なことに参加しなくなった	皆年を取ってしまい小さい子供がいないので地位行事もだんだん廃止になりあっても参加することはない	9
	地域に若い人がいなくなり跡取りの長男も外に出てしまったので年寄りが多く活気がない	9
	老人クラブや健康教室があるがほとんど参加しない	7
近所との付き合いはほとんどない	近隣や友人と困り事の相談をし合うことはない	10
	近隣との付き合いはほとんどない	8
	もう年寄りだから近所との付き合いはしなくてもいい	3
近隣の方は悪口を言うのでほどほどの付き合いがいい	近所の方は臆測で噂話をしたり陰で悪口を言うので深い付き合いはしない方がいい	15
	近隣でも挨拶をしない人がある	4
近隣とは物をあげたりもらったりしながら行き来してお互いを気にかけて生活をしている	近隣とはお互いに気にかけていながら行き来をしている	7
	近隣で声をかけ合いながら助け合っている	5
	近隣とは野菜あげたりもらったりしながらお付き合いをしている	3
	遠くの身内よりも近所の方が頼りになる	2
	近所の気の合う人と行き来して物をあげたりもらったりしている	2
困り事などを近隣や友人と相談し合っている	近隣や友人の相談に乗ることがある	9
	近隣や友人に生活の中の困り事を相談している	6

皆年を取ってしまい互いに行き来したり集まる機会がなくなった	昔は地域の交流もあったが皆年を取ってしまい集まったり会う機会がなくなった	8
	近隣とは会えば話をする程度で家を行き来するような付き合いはない	7
困りごとや今後の生活などは一人で考えず家族に相談している	困ったことがあれば夫や子どもに相談する	8
	年を取ったので今後のことについて家族と話している	4
災害時には家族や近隣など誰かしらの援助が必要だ	何かにつけ夫婦で話し合っている	3
	大きな災害時には誰かしらの救助が得られると思う	5
	昔の人の知恵や思いやりを生かして災害時に協力し合えば何とかかなと思う	3
	年を取っているので災害時は自分のことで精一杯なのでまわりの人達のことまで考えられない	2
	災害時の避難について夫婦で話し合っていて決めている	2
	透析中に災害が起きたらベッドにつかまり、おさまったらどういう道順である場所まで行くか教えてくれてある	1
人と会って話すことを楽しんでいる	老人クラブや地域の行事に楽しく参加している	4
	人に会って話すと冗談もいい話が弾む	4
	温泉に行くと皆と話しができて楽しい	3
坂道が多く交通手段が限られているので出かけるのに不便だ	年を取り思うように動けないため坂の多いこの地域ではどこにも行けなくなる	4
	人を訪ねるにも何をするにも坂道が多く大変だ	4
	用事を済ますのにバスを利用するが生活するには不便だ	2
介護保険サービスは利用していないが時々民生委員が訪ねてきてくれる	介護保険サービスがあるのは知っているが今は生活できているので利用していない	7
	ひとり暮らしの人や困っている人の所へ民生委員が訪ねてきてくれる	3

医療・介護等のサービスを利用しながら生活している	市や介護保険のサービスを利用しながら生活をしている	3
	治療の通院は病院の車が送迎してくれる	3
	デイサービスを利用している	2
地域の人たちと協力し合っている	地域の方は頼めば協力し合う	5
	近所で病人が出た時はお見舞いに行っている	3
子どもや孫に会いたい気持ちもあるが、あまり頼りきらないようにしている	孫になかなか会う機会もなくなって会ってもすぐに帰ってしまう	4
	何かと相談したい気持ちはあるが子どもに頼りきれない	3
	自分の兄妹とは絶縁状態でお付き合いはしていない	1
自分のできることは自分の役割だと思い協力している	地域のために役割を担っていることがある	3
	家族からの相談事や仕事に協力している	3
災害時のいざという時の対応が曖昧だ	災害時は道が通行止めになったり緊急ヘリが来るところまで遠いのでいざという時は利用できない	4
	災害時に助けてくれる人がいない	2
地区に週1回くる移動販売車を頼りに買い物をしている	地区に週1回くる移動販売車を頼りに買い物をしている	6
子どもなど家族から相談されることはない	子どもなど家族から相談されることはない	4
市町村合併し昔に比べて保健師との関わりも少なくなった	市町村合併し昔に比べて保健師との関わりも少なくなった	3
体調がいつ悪くなるか分からないので主治医に相談しながら一人で入院の準備をしている	体調がいつ悪くなるか分からないので主治医に相談しながら一人で入院の準備をしている	3
年金収入では生活が厳しく介護保険サービスは利用できない	年金収入では生活が厳しく介護保険サービスは利用できない	2

4) 夫婦世帯高齢者の“安心感のある暮らし”

研究参加者 10 名の逐語録より、“安心感のある暮らし”に関連する内容が表現されている部分を抽出した結果、280 のコードが作成された。この 280 のコードについて類似性と相違点に留意しながら分析した結果、62 のサブカテゴリが抽出され、最終的に抽象度を高めた【夫婦でお互いの健康を気遣いながら楽しく生活できていることが安心だ】【地域の過疎化が進行しこの先の希望が持てずに不安だ】【子どもや孫がいつも気にかけてくれるので安心だ】【病気や身体のことが一番心配だ】【災害による山間部特有の被害が考えられるので不安だ】【多少生活に不便があっても近隣との繋がりを持ちながら気楽に生活できれば安心だ】【住み慣れた地域で安心して生活できる施設や医療・介護の訪問サービスが充実していると安心だ】【お互いに年を取ったので先のことを考えると不安になる】【災害について色々考えてもなるようにしかならないが心配になる】【移動販売車やいざという時に利用できるサービスがあると安心だ】【近隣との付き合いがなくなってしまいさみしい】【身体の不自由なところもあるが特に不安なことはない】【年を取り思うように動けないので災害時はとても不安だ】【万全とまでは行かないが災害に備えて対応しているので安心だ】【何か困った時に相談できる人がいるので安心だ】【近隣に相談したりお互いに気にかけてくれる人がいることが安心だ】【山間部に伴う生活の不便さがあり大変だ】【仕事をしたり地域の人と交流することは楽しい】【何かあっても人に迷惑をかけないように頑張っている】【災害時には近隣との協力など様々な人から支援が得られないと大変だ】【年金収入で生活していくことは厳しく食べていくことが心配だ】【畑や土地が縮小してしまったことがさみしい】の 22 カテゴリが抽出された。

各カテゴリ名とコード数を表 7 に示す。

表 7 夫婦世帯高齢者“安心感のある暮らし”のカテゴリ

カテゴリ	サブカテゴリ	コード数
夫婦でお互いの健康を気遣いながら楽しく生活できていることが安心だ	夫婦二人で助け合いながら生活をしているので安心だ	9
	お互いに相手の健康を気にかけて気遣いながら生活している	8
	地域外への買い物は夫婦二人で行くので安心だ	6

	夫婦で日々楽しく過ごせるように冗談を言って笑ったり、お茶を飲みながら話をしている	3
	何かと頼りになるのは妻だ	3
	何でも話せる妻がいるので安心だ	2
	夫はわりと頭がキレて色々な手紙や書類の記載も全部してくれるから安心だ	1
地域の過疎化が進行しこの先の希望が持てずに不安だ	地域に若い人がいなくて過疎化が進んでいくことが心配だ	10
	地域に子どもがいなくて年よりばかりなので昔から続いている行事が廃止になることは淋しい	7
	この地域にはこれと言ってめぼしいものがなくこの先の希望が持てずに不安だ	3
子どもや孫がいつも気にかけてくれるので安心だ	子どもや孫が定期的に来て家事や仕事を手伝ってくれて助かる	7
	子どもや孫がいつもい気にかけて電話をくれるので安心だ	4
	子どもや孫が来てくれて嬉しい	3
	子どもや孫は自分たちのことを思ってくれていい子で嬉しい	2
	子ども達家族が仲良く幸せであれば安心だ	2
	娘たちもお父さんがちゃんとしてくれるから大丈夫だねと安心している	1
病気や身体のことが一番心配だ	病気や身体のことが一番心配だ	16
	歩行が不自由なことが心配だ	4
災害による山間部特有の被害が考えられるので不安だ	災害時の土砂崩れや大雨の浸水が一番不安だ	15
	山や家が崩れないようにしてもらえると安心だ	2
	災害時避難場所やそこまで行く道が危険なため不安だ	2
多少生活に不便があっても近隣との繋がりを持ちながら気楽に生活できれば安心だ	昔のように近隣との横のつながりを持てると安心して生活ができる	6
	趣味など楽しみがあり幸せだ	5

	多少生活に不便があってもこの地域で気楽に生活できれば安心だ	5
	子供に経済的に支援してもらわなくてもどうにか生活できるから安心だ	1
住み慣れた地域で安心して生活できる施設や医療・介護の訪問サービスが充実していると安心だ	地域で最期まで安心して生活できる終の棲家となる施設があると安心だ	6
	医療や介護の訪問サービスが充実していると安心だ	6
	昔に比べて保健師さんとの関わりも少なくなり心配だ	3
お互いに年を取ったので先のことを考えると不安になる	年を取ってきたので夫婦のお互いのことを考えると不安になる	8
	夫婦どちらかが逝ってしまった時のことを考えると不安だ	3
	子ども達の健康や仕事のことが心配だ	3
災害について色々考えてもなるようにしかならないが心配はある	災害への備えはあまりしていない	8
	災害時のことを考えると不安だが年を取って動けず誰の助けも期待できないためなるようにしかならないだろう	6
移動販売車やいざという時に利用できるサービスがあると安心だ	いざという時に利用できるデイサービスがあることが安心だ	7
	週1回近くに移動販売車が来るので安心だ	3
	近くに病院があり安心だ	3
近隣との付き合いがなくなってしまうとさみしい	近隣では人の悪口を言う人がいるので挨拶程度の付き合いが安心だ	6
	近所で顔見知りでも挨拶をしないことはさみしい	4
	近隣との付き合いがなくなってしまうとさみしい	3
身体の不自由なこともあるが特に不安なことはない	もう年を取ったので不安なんて考えても仕方がない	8
	身体の不自由なこともあるが特に心配なことはない	4

年を取り思うように動けないので災害時はとても不安だ	身体が不自由なので災害時に段差や坂を歩いて避難できないので心配だ	6
	災害時は緊急車両通る道の閉鎖や緊急ヘリが来る所まで遠いのでいざという時が心配だ	3
	断水になってもいいように、坂の上に水槽があるが、そこまで上がっていくのも大変なので、個々で水槽を持つようにしないと駄目だと思う	1
万全とまでは行かないが災害に備えて対応しているので安心だ	災害に備えてヘルメットや非常用袋を用意している	6
	昔は土砂崩れがあり大変だったが今は防災工事をしてあるので安心だ	2
	透析の病院でも災害時のことをちゃんと教えてくれているので安心です	1
何か困った時に相談できる人がいるので安心だ	何か困ったりしたときは子どもに相談しているので安心だ	5
	体調を崩した時や不幸が起きた時のことを決めてあるので安心だ	3
近隣に相談したりお互いに気にかけてあえる人がいることが安心だ	地域に相談し合える相手がいて安心だ	5
	近隣の人が野菜を届けてくれたり様子を見に来るなど気にかけてくれることが安心だ	3
山間部に伴う生活の不便さがあり大変だ	この地域は坂道が多く車がないと生活が不便だ	5
	畑で野菜を作っても獣に荒らされてしまうことが心配だ	3
仕事をしたり地域の人と交流することは楽しい	農業は忙しいが仕事ができることが生きがいで楽しい	5
	地域の行事に参加して人と交流できることは楽しい	2
何かあっても人に迷惑をかけないように頑張っている	家族と疎遠になり何かあっても相談できずさみしい	4
	身のまわりのことや緊急時でも人に迷惑をかけないように頑張っている	3

災害時には近隣との協力など 様々な人から支援が得られな いと大変だ	昔の人の知恵、思いやりを生かして災害時には協力し合えば何とかなると思う	4
	災害時は行政の支援がなかったらダメだと思う	1
	地震などが起きたとき、近くに住む娘の協力が得られると思う	1
年金収入で生活していくことは厳しく食べていくことが心配だ	年金収入で生活していくことは厳しく食べていくことが心配だ	6
畑や土地が縮小してしまったことがさみしい	畑や土地が縮小してしまったことがさみしい	3

VIII. まとめ

独居高齢者は、昔から続いている近隣との付き合いが現在のソーシャル・サポートに繋がっていた。高齢化に伴い部落内を行き来する範囲は縮小し、お互いに特別な相談をすることは少なくなったが、お互いに物をあげたりもらったりしながらさりげない支援をし合いながら生活をしていた。その中で、困った時にすぐに駆けつけてくれる近隣の存在や、いつも気にかけてくれる別居子を何よりも頼りにしていた。また、定期的に訪問してくれる民生委員や介護保険事業所などの存在も重要なサポートになっており、生活する中での安心感に繋がっていた。

一方、夫婦世帯高齢者では、夫婦でお互いの健康を気遣いながら協力し合って生活しており、いつも気にかけてくれる別居子の存在を心強く感じていた。また、地域の過疎化が進行することで昔から続いてきた地域行事が廃止になることにさみしさを感じていた。しかし、近隣との付き合いは挨拶をする程度であり、困った時に支え合うサポートの仕組みは希薄であった。山間部特有の災害時の不安や生活の不便さを感じつつも、自分らしく生活できることを望んでいた。

これらのことから、今後も住み慣れた地域で生活を継続していくためには、高齢者の心身の健康維持・増進や、近隣との付き合いの継続、定期的に訪問してくれる人の存在を含めた地域での見守りシステムなど、高齢者保健福祉活動における支援の必要性が示唆された。

謝辞

本研究の実施にあたり、多大なご協力をいただきました B 町担当保健師様、ならびに D 地区長様、D 地区担当民生委員様、D 地区住民の皆様方に心より感謝申し上げます。

【文献】

- 1) 内閣府：平成 24 年度版高齢者白書(2013. 4. 25 閲覧),
URL:http://www8.cao.go.jp/koueri/whiteoaoer/w-2012/zenbun/sl_1_1_02.html
- 2) 農林水産省：中山間地域農業をめぐる情勢 農村振興局(2013. 04. 25 閲覧),
URL:http://www.maff.go.jp/j/study/other/cyusan_taisaku/32/pdf/dat1.pdf
- 3) 流石ゆり子, 小野興子, 林正健二他：少子高齢化時代の地域ネットワーク多参画社会の構築と人材育成Ⅲ—ひとり暮らし・夫婦世帯の高齢者に焦点をあてて—, 山梨県立大学地域研究交流センター研究報告書, 2007.
- 4) 小山尚美, 流石ゆり子, 河野由乃他：過疎農村地域に暮らす後期高齢者の現在および今後の生活に対する思い, 山梨県立大学看護学部紀要, 11, 27-37, 2009.
- 5) 郷洋子, 山岸春江：山間地域に居住する独居高齢者の人との交流・外出状況の実態, 山梨県立看護大学紀要, 7, 9-18, 2005.
- 6) 三宅弘枝, 中谷久恵：独居高齢者の健康と災害に対する備え, 保健師ジャーナル, 68(10), 896-902, 2012.
- 7) 斉藤嘉孝, 近藤克則, 吉井清子他：高齢者の健康とソーシャルサポート—受領サポートと提供サポート—, 公衆衛生, 69(8), 661-665, 2005.
- 8) 森慶輔, 三浦香苗：ソーシャルサポートの文献的研究—ストレスに対する多様な影響に焦点を当てて—, 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 1, 137-144, 1998.
- 9) 高橋亜由美, 水野杏美, 福川尚克他：都市部に住む運動機能障害の近隣住民からのソーシャルサポートの実態—地震災害時に対する平常時の活動に着目して—, 日本在宅ケア学会, 14(1), 70-77, 2010.
- 10) 富樫ひとみ：高齢者によるソーシャルサポート提供の動機と効果, 健康科学大学紀要, 7, 73-83, 2011.
- 11) 和気純子：高齢者をめぐるソーシャルサポートの動向と特性—全国調査(2005 年)のデータ分析を通して—, 人文学報社会福祉学, 23, 29-49, 2007.
- 12) 大森純子：高齢者にとっての健康『誇りを持ち続けられること』農村地域におけるエスノグラフィーから, 日本看護科学会誌, 24(3), 12-20, 2004.

- 13) 合田佳代子, 高嶋伸子, 太田武夫, 篠岡有雅: 一人暮らし高齢者を支える地域住民の支援の特徴, 香川県立保健医療大学紀要, 13, 17-22, 2006.
- 14) 西村昌記: 一人暮らし高齢者の生活課題—サポート・ネットワークの観点から—, 老年精神医学雑誌, 15(2), 184-191, 2004.
- 15) 金川克子, 斉藤恵美子: 単身高齢者に対する地域の支援, 老年精神医学雑誌, 15(2), 181-183, 2004.
- 16) 村田千代栄, 斎藤嘉孝, 近藤克則, 平井寛: 地域在住高齢者における社会的サポートと抑うつに関連—AGES プロジェクト—, 老年社会科学会, 33(1), 15-22, 2011.
- 17) 斎藤民, 甲斐一郎, 杉澤秀樹, 柴田博: 高齢者の居住継続性とその関連要因—別荘地に移住した高齢者への5年間の追跡研究—, 老年社会科学会, 33(3), 385-394, 2011.
- 18) 工藤禎子, 佐伯和子: 引越した高齢者における新たな近隣関係の構築に関する意識と行動, 老年看護学, 17(1), 37-45, 2012
- 19) 鈴木征男: 中高年におけるソーシャル・サポートの役割—孤独感との関連について—, 第一生命経済研究所, LIFE DESIGN REPORT 2005年7月 (2013.5.7閲覧), http://group.dai-ichi-life.co.jp/cgi-bin/dlri/life_d_report.cgi
- 20) 松本清子, 東條光雅: 一人暮らし高齢者へのソーシャルサポートと精神的健康の関連性, 日本保健福祉学会誌, 7(2), 81-89, 2001.
- 21) 小林恵子, 平澤則子, 飯吉令枝他: 農村地域に暮らす高齢者の生活ニーズとソーシャル・サポートの検討—サービス提供者のフォーカス・グループ・インタビューから—, 保健師ジャーナル, 64(3), 258-263, 2008.
- 22) 斎藤美華, 小林敦子, 服部ユカリ: 前期高齢者の「お茶のみ」がソーシャルサポートと主観的幸福感および交流の充実感に及ぼす影響, 日本地域看護学会誌, 7(2), 41-47, 2005.
- 23) Lambert Maguire/著, 小松源助, 稲沢公一/訳: 対人援助のためのソーシャルサポートシステム, 川島書店, 1-35, 1994.
- 24) 古谷野亘, 柴田博, 中里克治他: 地域老人における活動能力の測定—老研式活動能力指標の開発—, 日本公衆衛生雑誌, 34(3), 109-114, 1987.

資 料

1. 研究協力依頼書
 - 1-① 保健師用
 - 1-② 自治会区長用
 - 1-③ 民生委員用
2. 研究協力承諾書
3. 研究参加者への依頼文
4. 同意書
 - 4-① 本人用
 - 4-② 保管用
5. インタビューガイド
6. 老研式活動能力指標

平成 年 月 日

〇〇市役所 地域包括支援センター
保健師 〇〇 様

山梨県立大学 看護学部
老年看護学 森田祐代

**山間過疎地域で暮らす独居・夫婦世帯高齢者の支援に関する研究
～後期高齢者の“安心感のある暮らし”に焦点をあてて～
研究への協力について（依頼）**

初夏の候、本学の研究・協力につきましては、平素格別のご配慮を賜り、厚くお礼申し上げます。
私どもは、地域に開かれ、地域と向き合う大学を目指すため、日々教育研究を重ねております。

わが国では人口が減少する一方で、高齢者人口の割合は年々増加してきています。また少子化や若者の都市部への進出、核家族化などの様々な社会の変化によって、ひとり暮らしや夫婦だけで生活している方が増加しています。地域で生活する高齢者の方が、住み慣れた地域で安心して最期まで暮らし続けられるには、ご家族や友人、となり近所との支え合いが不可欠であり、地域住民を含めた高齢者保健福祉活動のネットワーク化が重要であると考えます。

そこで本研究では、現在ひとり暮らしをされている方やご夫婦世帯の皆様に個別にインタビューをさせていただき、現在の生活の様子、近所付き合いの内容（声かけや支え合い）、当事者が考える“安心感のある暮らし”についてその実態を明らかにするとともに、地域で安心して生活できるためには地域にどのような支え合いの仕組みがあればよいのかを検討し、必要な支援及びそのネットワークのあり方について明らかにしたいと考えています。

研究へのご協力につきましては、対象者個々に文書と口頭でわかりやすく説明させていただき、ご本人の自由意思を尊重いたします。また、個人のお名前が特定できないようにするとともに、得られた結果は、目的以外では使用しません。結果を公表する場合もございますが、個人が特定されることは一切ありません。

貴地域包括支援センター管轄地域内の候補者の選定およびインタビューの仲介につきまして格段のご配慮をお願いいたします。

以上をお読みいただき、本研究への協力を承諾していただける場合は、次ページの「研究協力承諾書」にご記入をお願いいたします。

平成25年6月

『山間過疎地域で暮らす独居・夫婦世帯高齢者の支援に関する研究』

研究代表者 森田 祐代

共同研究者 流石ゆり子 渡邊 裕子 小山 尚美 萩原理恵子

今橋 美穂 雨宮 ゆみ

問い合わせ先：山梨県立大学看護学部 老年看護学

〒400-0062 山梨県甲府市池田 1-6-1

電話：055-253-9143（森田祐代）

メール：scy-mrt@yamanashi-ken.ac.jp

平成 年 月 日

〇〇地区
区長 〇〇 様

山梨県立大学 看護学部
老年看護学 森田祐代

**山間過疎地域で暮らす独居・夫婦世帯高齢者の支援に関する研究
～後期高齢者の“安心感のある暮らし”に焦点をあてて～
研究への協力について（依頼）**

初夏の候、皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。
私どもは、地域に開かれ、地域と向き合う大学を目指すため、日々教育研究を重ねて
おります。

わが国では人口が減少する一方で、高齢者人口の割合は年々増加してきています。
また少子化や若者の都市部への進出、核家族化などの様々な社会の変化によって、ひ
と暮らしやご夫婦だけで生活している方が増加しています。
地域で生活する高齢者の方が、住み慣れた地域で安心して最期まで暮らし続けられる
には、ご家族や友人、となり近所との支え合いが不可欠であると思われます。

そこで本研究では、現在ひとり暮らしをされている方やご夫婦世帯の皆様にご個別に
インタビューおよび録音をさせていただき、現在の生活の様子、近所付き合いの内容
（声かけや支え合い）、当事者が考える“安心感のある暮らし”についてお話を伺い、
その実態を明らかにするとともに、地域で安心して生活するためには地域にどのよ
うな支え合いの仕組みがあればよいのか考えていくための資料にしたいと考えてい
ます。また、得られた資料を基に、住み慣れた地域で最期まで暮らし続けるために必
要な支援及びそのネットワークのあり方を明らかにしていきたいと考えています。

研究へのご協力につきましては、対象者個々に文書と口頭でわかりやすく説明させ
ていただき、ご本人の自由意思を尊重いたします。また、個人のお名前が特定できな
いようにするとともに、得られた結果は、目的以外では使用しません。結果を公表す
る場合もございますが、個人が特定されることは一切ありません。

研究に協力していただける候補者の選定およびインタビューの仲介につきまして
格段のご配慮をよろしくお願い申し上げます。

以上をお読みいただき、本研究への協力を承諾していただける場合は、次ページの
「研究協力承諾書」にご記入をお願いいたします。

平成25年6月

『山間過疎地域で暮らす独居・夫婦世帯高齢者の支援に関する研究』

研究代表者 森田 祐代

共同研究者 流石ゆり子 渡邊 裕子 小山 尚美 萩原理恵子

今橋 美穂 雨宮 ゆみ

問い合わせ先：山梨県立大学看護学部 老年看護学

〒400-0062 山梨県甲府市池田 1-6-1

電話：055-253-9143（森田祐代）

メール：scy-mrt@yamanashi-ken.ac.jp

平成 年 月 日

〇〇地区
民生委員 〇〇 様

山梨県立大学 看護学部
老年看護学 森田祐代

**山間過疎地域で暮らす独居・夫婦世帯高齢者の支援に関する研究
～後期高齢者の“安心感のある暮らし”に焦点をあてて～
研究への協力について（依頼）**

初夏の候、皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。
私どもは、地域に開かれ、地域と向き合う大学を目指すため、日々教育研究を重ねて
おります。

わが国では人口が減少する一方で、高齢者人口の割合は年々増加してきています。
また少子化や若者の都市部への進出、核家族化などの様々な社会の変化によって、ひ
と暮らしやご夫婦だけで生活している方が増加しています。
地域で生活する高齢者の方が、住み慣れた地域で安心して最期まで暮らし続けられる
には、ご家族や友人、となり近所との支え合いが不可欠であると思われます。

そこで本研究では、現在ひとり暮らしをされている方やご夫婦世帯の皆様にご個別に
インタビューおよび録音をさせていただき、現在の生活の様子、近所付き合いの内容
（声かけや支え合い）、当事者が考える“安心感のある暮らし”についてお話を伺い、
その実態を明らかにするとともに、地域で安心して生活するためには地域にどのよ
うな支え合いの仕組みがあればよいのか考えていくための資料にしたいと考えてい
ます。また、得られた資料を基に、住み慣れた地域で最期まで暮らし続けるために必
要な支援及びそのネットワークのあり方を明らかにしていきたいと考えています。

研究へのご協力につきましては、対象者個々に文書と口頭でわかりやすく説明させ
ていただき、ご本人の自由意思を尊重いたします。また、個人のお名前が特定できな
いようにするとともに、得られた結果は、目的以外では使用しません。結果を公表す
る場合もございますが、個人が特定されることは一切ありません。

研究に協力していただける候補者の選定およびインタビューの仲介につきまして
格段のご配慮をよろしくお願い申し上げます。

以上をお読みいただき、本研究への協力に承諾していただける場合は、次ページの
「研究協力承諾書」にご記入をお願いいたします。

平成25年6月

『山間過疎地域で暮らす独居・夫婦世帯高齢者の支援に関する研究』

研究代表者 森田 祐代

共同研究者 流石ゆり子 渡邊 裕子 小山 尚美 萩原理恵子

今橋 美穂 雨宮 ゆみ

問い合わせ先：山梨県立大学看護学部 老年看護学

〒400-0062 山梨県甲府市池田 1-6-1

電話：055-253-9143（森田祐代）

メール：scy-mrt@yamanashi-ken.ac.jp

**「山間過疎地域で暮らす独居・夫婦世帯高齢者の支援に関する研究
～後期高齢者の“安心感のある暮らし”に焦点をあてて～」に関する
研究協力承諾書**

「山間過疎地域で暮らす独居・夫婦世帯高齢者の支援に関する研究 ～後期高齢者の“安心感のある暮らし”に焦点をあてて～」に関する調査について、文書をもって説明を受けました。研究計画書に明記されている内容を理解し、研究協力することを承諾します。

平成 年 月 日

氏名 _____ 印 _____

高齢者のみなさまへ（聞き取り調査へのご協力のお願い）

盛夏の候、皆様におかれましては、日々お元気でお過ごしのことと存じます。

私どもは、『山間過疎地域で暮らす独居・夫婦世帯高齢者の支援に関する研究 ～後期高齢者の“安心感のある暮らし”に焦点をあてて～』をテーマに研究に取り組んでおります。

わが国では高齢社会を迎え、今後もますます高齢者人口が増え続けていきます。また子供の出生の数は減り、若者は都市部へ進出し、おひとり暮らしやご夫婦だけで生活している方が増加しています。

地域で生活する皆さま方が、住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるには、ご家族や友人、となり近所との支え合いが不可欠であると思われます。

そこで本研究では、現在ひとり暮らしをされている方やご夫婦世帯の皆様個別に直接お話をうかがい、お話の内容を録音をさせていただき、現在の生活の様子、近所付き合いの内容（声かけや支え合い）、皆様方が考える“安心感のある暮らし”についてお話を伺い、地域で安心して生活するためには地域にどのような支え合いの仕組みがあればよいのか考えていくための資料にしたいと考えました。また、そのことをふまえて、今後必要な支援のあり方についても考えていきたいと思っています。

直接お話をうかがう面談は、休憩を取りながら60分程度を予定しております。話したくない内容についてはお話いただくなくても構いません。そのことで不利益な扱いを受けることも一切ありません。また、録音した内容は専門の業者が文字に編集し、その後は個人が特定されないように番号をつけて取り扱い、研究終了後はすぐに消去します。なお、お話になった内容が他者に伝わることも一切ありません。

研究への協力につきましては、分かりやすく説明させていただき、皆様の自由意思を尊重いたします。また、個人のお名前が特定できないようにするとともに、得られた結果は、目的以外では使用しません。結果を公表する場合もございますが、個人が特定されることは一切ありませんので、ご協力をお願いいたします。

なお、本研究に関するお問い合わせは、下記までお願い致します。

平成25年 月 日

『山間過疎地域で暮らす独居・夫婦世帯高齢者の支援に関する研究』

代 表 森田 祐代

メンバー 流石ゆり子 渡邊 裕子 小山 尚美 萩原理恵子
今橋 美穂 雨宮 ゆみ

連絡先：山梨県立大学看護学部 老年看護学

電話：055-253-9143（森田 祐代）

同 意 書

私は、「山間過疎地域で暮らす独居・夫婦世帯高齢者の支援に関する研究～後期高齢者の“安心感のある暮らし”に焦点をあてて～」の研究について研究の目的、内容、方法及び倫理的配慮等について、研究者より文書を用いて十分な説明を受け、理解いたしました。

そこで、私の自由意思にもとづいてこの研究に参加することに同意します。

日付：平成 年 月 日

参加者（署名）

研究者（署名）

同 意 書

私は、「山間過疎地域で暮らす独居・夫婦世帯高齢者の支援に関する研究～後期高齢者の“安心感のある暮らし”に焦点をあてて～」の研究について研究の目的、内容、方法及び倫理的配慮等について、研究者より文書を用いて十分な説明を受け、理解いたしました。

そこで、私の自由意思にもとづいてこの研究に参加することに同意します。

日付：平成 年 月 日

参加者（署名）

研究者（署名）

インタビューガイド

調査日：平成 25 年 月 日

調査場所：

調査者：

本人からのデータ収集内容

1. 年齢 歳
2. 性別 男性 女性
3. 居住年数 年
4. 健康状態 良好 治療中 その他 ()
 定期受診 なし ある ()
 内服治療 なし ある ()
5. 活動能力 ※別紙 『老研式活動能力指標』

インタビューガイド（面接ガイド）

本研究のテーマである「山間過疎地域で暮らす独居・夫婦世帯高齢者の支援に関する研
 ～ 後期高齢者の“安心感のある暮らし”に焦点をあてて ～」を明らかにするうえで、
 情報が偏りなくとれるように項目を出している。

質問の順序や言い回し方などは、その時々話の流れや対象者の様子などによって変化
 させていき、必要時、調査者は質問を自由に発展させて聞いていくこともできる。面接
 の良し悪しは、インタビューガイドに忠実に行うことではなく、テーマに関する対象者
 の語りを豊かに引き出せたかによる。

注意点

1. 質問はできるだけ非指示的で、はい—いいえで答えるものにしない。
2. 対象者の特性を考慮し、聞き取りやすく、ゆっくりはっきり話す。
3. 意味が分かりにくい曖昧な質問はしない。焦点が明確な質問をする。
4. うなずきやアイコンタクトなど、非言語的に語りを促す。
5. 論理的におかしかったり、辻褄が合わないことも、本人にとってはどれも事実で
 あるので、否定せずに認める。

【ソーシャルサポートの授受に関する質問】

- ・困った時に相談に乗ってくれる相手がいますか。（情緒的サポート受領に関する質問）
- ・どのような困りごとを誰に相談すると安心しますか。（情緒的サポート受領に関する質問）
- ・実際に困った時に支援してくれる人はいますか。（手段的サポート受領に関する質問）
- ・それは、具体的にどのような支援をしてくれますか。（手段的サポート受領に関する質問）
- ・誰かの相談相手になることはありますか。（情緒的サポート提供に関する質問）
- ・どのようなことに相談にのってあげたことがありますか。（情緒的サポート提供に関する質問）
- ・実際に誰かの支援をしてあげることはありますか。（手段的サポート提供に関する質問）
- ・現在使っている社会資源（サービス）はありますか。それは具体的にどのようなサービスですか。（手段的サポート受領に関する質問）

【日常生活の様子に関すること】

- ・毎日、一日をどのように過ごされていますか。（生活の流れ、習慣に関する質問）
- ・日頃、近所つき合い・人づき合いはされていますか。（つき合いの有無に関する質問）
- ・具体的には、どのようなお付き合いされていますか。（つき合いの内容に関する質問）
- ・近所づき合い・人づき合いで良かったと感じること、または困難を感じることはありますか。（感情に関する質問）
- ・どのような付き合いを継続していくことが良いと考えますか。（価値/期待に関する質問）

【地域行事への参加に関する質問】

- ・この地域では年間を通して、どのような行事がありますか。（認知/行動に関する質問）
- ・どのような行事に参加されているのか（していないのか）について教えてください。（行動に関する質問）
- ・地域行事に関して、どのような工夫があると良いと思いますか。（価値/期待に関する質問）

【安心感のある暮らしに関する質問】

※上述の内容と関連させる中で不安なこと、どんな時に安心感が得られるかなどが語られてくる

- ・現在の生活で不安に思うことはありますか。（価値に関する質問）
- ・この地域で最期まで暮らし続けるために必要なことはどのようなことだと考えますか。（価値/意見/希望に関する質問）
- ・災害等について自分なりに備えていることを教えてください。（価値/行動に関する質問）

老研式活動能力指標

毎日の生活についてうかがいます。以下の質問のそれぞれについて、「はい」「いいえ」のいずれかに○をつけて、お答えください。質問が多くなっていますが、ご面倒でも全部の質問にお答えください。

実施日 平成 2 5 年 月 日

氏 名

	質 問	1 0	1 か 0 を記入
1.	バスや電車を使って一人で外出できますか	はい いいえ	
2.	日用品の買い物ができますか	はい いいえ	
3.	自分で食事の用意ができますか	はい いいえ	
4.	請求書の支払いができますか	はい いいえ	
5.	銀行預金・郵便預金の出し入れが自分でできますか	はい いいえ	
6.	年金などの書類が書けますか	はい いいえ	
7.	新聞を読んでいますか	はい いいえ	
8.	本や雑誌を読んでいますか	はい いいえ	
9.	健康についての記事や番組に関心がありますか	はい いいえ	
10.	友だちの家を訪ねることがありますか	はい いいえ	
11.	家族や友だちの相談にのることがありますか	はい いいえ	
12.	病人を見舞うことができますか	はい いいえ	
13.	若い人に自分から話しかけることがありますか	はい いいえ	
		合計得点	

